



祖母をまつ靴

私の祖母は働き者。仕事を引退してからも「出来ることは自分でやる」がモットーで、どんな小さなことでも家のなかで仕事を探して、自分自身の洗濯やお湯を沸かしたりと自ら率先して取り組んでいた。その祖母が、家のなかで転倒するようになったのはいつの頃からだろう。祖母の口癖は、『外に出るのが怖い』『また転んだら大変だ』。周りに迷惑をかけることを一番嫌う祖母は日に日に出歩かなくなっていった。家の中でも、慎重に慎重に歩く。元気な頃はスリッパで廊下を、いそいそ歩いていたが、転んでからははくことをやめた。そんな中、リハビリ用に外を歩く靴が家にやってきた。真新しい赤紫の靴は、玄関の片隅にひっそりと置かれていた。いつ祖母ははくのだろうか？と私は出勤する時、朝晩いつも気にはかけていたが、一向にはいた形跡はない。そのうち、祖母はベットでの生活に移行した。自宅での介護が始まった。ある晩、救急車で運ばれた際に私は見た。車椅子に乗せられた祖母の足に、あの靴があった。とても悔しかったし悲しかった。日の当たる道を、祖母が好きな赤紫の靴で手を繋いで一緒に歩けたら。梅の花を一緒に見たかった。そんな思いで、胸が張り裂けそうだった。祖母は最期まで歩こうとしていた。歩けると信じていたのだと私は思う。きっと元気な頃の自分の歩く姿を記憶のなかで覚えていたのだろう。主人を待つ靴と、祖母の話。きっとたくさんの靴が、その人の人生の大事な瞬間を支えてきたのだと思います。ありがとう。



靴は自分の人生を楽しむために大事なものの

学生の時、靴屋さんでアルバイトをしていました。

それまでは靴に興味はなく、持っているのもスニーカーひとつとスーツを着たりする時用のパンプスひとつだけ。たまたま目に入った求人広告の条件が自分の希望と合っていたので応募しただけで、靴は「履ければいい」くらいの感覚でしたが、店長さんが学生バイトの私にも丁寧に靴の種類や選び方、足の形の豊富さ、中敷きや防水スプレーなどの使い方とその便利さ、さらには就活などで初めてパンプスを履くようなお客様に合わせたヒールの選び方など、本当に多くの知識を教えてください、知れば知るほど奥の深い靴の世界に魅了されて気づいたら20足以上の靴が我が家の玄関に並んでいました。

足のサイズは長さしか知らなかった私も、幅の広さ・狭さが意外と歩きやすさに影響することを知り、「歩きやすい靴」を探すと幅広の靴が多いけど実は幅が狭い私の足にはそれだと逆に歩きにくいんだと知ったのも大きかったです。幅の狭い私に合う自分が歩きやすい靴をちゃんと選べば足も痛くならず疲れにくくなると実感してからは、ちゃんと靴を選ぶことで色んなところに出かけて歩き回るのが億劫ではなくなりました。

また、知識が増えるごとにお客様の悩みや目的に合わせた提案が出来るようになり、そうやってアドバイスしたことをとても喜ばれて笑顔で帰っていくお客様の姿に私も嬉しくなる、そんな風にバイトの時間を心から楽しめるようになって、この先の人生で選ぶ仕事も、こんな風に誰かを笑顔にしていけるような、そんな仕事をしたい、そんな生き方をしたい、と思うようになり、就職の時の指針にもなりました。

私にとって靴は「好きなところに行き、自分の人生を楽しむために大事なもの」へと変化し、靴屋で過ごした時間が人生にも影響するほど大事な経験になっています。



靴とリハビリテーション

私の職業は、患者さんのリハビリテーションを担当する理学療法士でした。今年、退職するまでの 42 年間、多くの患者さんと一緒に協同してリハビリテーションに取り組みました。

なかでも特に歩行練習はやりがいがあり、その準備で最も大切にしたのは靴選びでした。それに機能性を重視することは当然ですが、それ以上に「ファッション性」も大事にしました。患者さんと一緒に何冊かのカタログを見て、何足か試着して、履いている姿を鏡で自ら眺め、吟味し納得いく靴を相談して決めていました。

その靴を履いての歩行練習は、患者さん自身の意欲を向上させ、多くの効果がありました。それは、歩ける距離や速さだけではありませんでした。お気に入りの靴を履いて歩く姿を鏡で自ら見ることで姿勢が日々良くなり、安定性が格段に向上しました。

患者さんは皆、選んだ靴に愛着を感じ、可愛い名前を付けている方もいました。さらに自身の座右の銘を靴に記入して、リハビリテーションの励みにされている方もいました。

これらの数多の経験を通じて私は、リハビリテーション場面においても靴には機能性と共に「ファッション性」も大切であることを患者さんに教わり学びました。



阪神・淡路大震災で被災した靴

二十七年前に起こった阪神・淡路大震災で芦屋の実家が全壊しました。家族が大切にしていた靴もほとんどが被災し、母の兄も潰れた家の下敷きになって亡くなりました。唯一残されたのが母が避難する時に履いていた靴です。窓ガラスが粉々に割れて床に散乱している危険な状況で、母の足を守ってくれた丈夫な靴。母と一緒にその靴は避難所まで無事に逃げることができました。そのほかの母が大切にしていた靴は避難させることができず、全壊した家におきざりになってしまいました。未曾有の大地震は家族の尊い命ばかりではなく、思い出のたくさん詰まった大切なものを奪い去ってしまったのです。

春になってようやく瓦礫の撤去が始まり、掘り出された靴は泥だらけで水浸しになっていました。

どの靴も母にとっては大切な思い出の詰まったものばかりです。唯一、震災の日に母と一緒に避難した靴をなでながら「この靴が大切な足を地震から守ってくれたんだねえ」と母は感慨深くつぶやきました。母の足を避難するときも、避難所での不自由な生活の中でも寄り添い、守り続けてくれた一足の靴。阪神・淡路大震災は被災者から多くのものを奪っていききましたが、私たちにとって何が一番大切なのかを気づかせてくれました。靴はただ履くためだけのものではなく、靴の持ち主を災害から守る役目も果たしてくれているのだということを震災を通して学ぶことができました。母を大地震から守ってくれた靴に感謝の気持ちの「ありがとう」を伝えたいです。



銭湯とスニーカー

三十四年前、広島大学へ進学した私。初めての一人暮らしは、六畳一間の木造アパート。トイレは共同で風呂なし。なので近所の銭湯へ通うことになった。

洗面器など入浴セット一式を持ち、緊張しながら通い始めた数日後、事件は起きた。共同下駄箱からお気に入りのスニーカーが消えたのだ。

パニックで番台のおばあさんへ告げると、

「たま〜におるんよねえ。間違えて履いて帰るお客さんが」

仏頂面で、眉ひとつ動かさぬおばあさん。面倒臭そうに、「それ、どがぁな靴ね？」

「新品のアディダスの青いスニーカーです」

「新品のメーカー品？ そがぁに上等な靴を銭湯に履いてきんさんな！」

頭ごなしに叱られ、シュンとした私。おばあさん、さすがに言い過ぎたと思ったのか、

「あんた、〇〇大の学生さんじゃろ。どっから来たん？」

「……長崎です」

「ほうね、じゃあその靴は親御さんが買ってくれちゃったんじゃないかね。サイズは？」

問われるがまま答え、古びたサンダルを借りて帰宅。情けなくて涙がこぼれた。

ところが翌晩、銭湯ののれんをくぐると、下駄箱の壁にデカデカと張り紙が貼ってあった。

四月〇日 青いスニーカーをはいて帰ったお客さんへ。

長崎からきた学生さんが困っとるんよ。

親御さんからの入学祝いなんど。

気の毒じゃけえ、返してあげんさい。

書きなぐったような下手くそな墨字。

驚くやら恥ずかしいやらで、顔を伏せるようにして借りたサンダルと菓子を渡しに行くと、番台でおばあさんがにんまり。

「よう書けとるじゃろ？ 待っとりんさい。必ず靴は戻ってくるけえ」

その言葉通り、数日後に戻ってきたスニーカー。紙袋に入れて、こっそり下駄箱の隅へ置いてあったそう。

「えかったねえ。世の中捨てたもんじゃなかろう。その靴、大事にしんさいよ。ほれ」

満面の笑みでスニーカーを渡してくれたおばあさん。胸がジーンとして、私は深く頭を下げた。

その後も通い続けた銭湯。すっかり馴染みになったおばあさんには、孫のように可愛がってもらった。

青いスニーカーも大切に履き続けた。ボロボロに擦り切れるまで。

忘れられない素敵な靴の思い出だ。



素敵な時間の過ごし方

私の親友のお話です。もう 15 年近く前の話になりますが…当時お互い独身だった私達。彼女が話してくれたことが今でも忘れられません。

この前の週末、家にある靴を全部ピカピカに磨いたんだよねー気持ちよかった。と彼女は話してくれました。それからまもなく白馬に乗った人が現れたから結婚するわ！と。その時に靴をピカピカにする素敵な時間の過ごし方が出来る人には幸せが訪れるんだと知りました。

彼が出来ない。結婚出来ない。と嘆く後輩には今でもこの話をしています。



パンプスと歩んだ軌跡

今から4年前、私は新規事業企画の仕事をしていた。会社の中で、チームは二名しかおらず、一名は別企画の担当。一人で考えて、行動する。大変な仕事だった。普段は私服の会社だが、外に出ることもあった。その時はジャケットをはおり、必ず黒のパンプスを履いていた。雨が降っても大丈夫なように、雨晴兼用の黒のエナメルのパンプスだった。

外部に企画を売り込みに行くとき、心臓がはち切れるのではないかと思うほど緊張しながら歩き回った。雨の日も、晴れの日も。朝起きて、今日は出張の日、と玄関で黒のパンプスに足を通すときに、「よし！」と気合を入れていた。どんなジャケットにも合う黒のパンプスは私の相棒だった。履き心地が良く、足にフィットして、きちんと見える。この靴があればどんな場面に出くわしても恥ずかしくない、そんな万能なパンプスだった。

新規事業の企画は上手くいき、今では会社のサービスの一つとなっている。私はその後転職し、今ではそのパンプスを履くことはなくなっている。しかし、ふとこの間シューズボックスを整理していたら、そのパンプスが出てきた。黒の光沢を見た途端に、当時の緊張と仕事への熱意が蘇ってきた。あの時、がむしゃらに頑張っていたな。そして、パンプスと一緒に仕事をしてきた感覚にふとなった。

どんなときも、一緒に歩いたパンプス。私の苦しい思いも、ドキドキも、達成感も、みんなこの靴は知っている。そんな気持ちになった。改めてパンプスにお礼を言いたい。私の一部となって仕事のお供をしてくれてありがとう。おかげで仕事は上手くいったよ。また履く機会があったら、その時はよろしくね。



靴は魔法使い

デパートの靴売り場で、自分のほしい靴を、あれこれと探して、やっと気にいった靴を見つけて、店頭の靴では、足のサイズが合いませんの時、店員さんと呼んで希望の靴を持って来てもらっている間、店内のソファに座っています。店員さんが、希望のサイズの靴を持って来てくれて、足元に跪いて、「いかがですか」と言って、その靴を足元においてくれる瞬間が、まるでシンデレラになった気分をちょうだいします。

そのサイズが、足にピッタリだと、心は天国状態。レジに靴を持って行き、お金を払って、手さげ袋に入れてもらって、やっと、私の物になります。

心は、軽やかで、何かいいことがありそうな、モチベーション状態。こういう流で、私のゲタ箱の中の靴は、並べられています。玄関で、靴をはくと、今日も一日のはじまりで、頑張ろうという前向きな私になります。